

岐阜農林事務所の普及活動状況 令和4年8月30日現在

今月の重点活動

■いちご グリーンな栽培体系への転換サポート第1回事業説明会

岐阜地域のいちご産地が、天敵利用や寒冷紗設置等によるアザミウマ類、コナジラミ類等の微小害虫の防除、防虫ネットによるハスモンヨトウの被害軽減など、環境負荷低減と省力化の検証、当地域に適した技術の普及を図ることを目的とした実証事業を開始した。

管内のJAいちご生産5部会と岐阜農林事務所農業普及課で組織する「グリーンないちご栽培研究協議会」が事業主体となり、グリーンな栽培体系への転換サポート事業（国補）を活用した取組みで、令和6年度までの3か年かけて実証と技術の普及を図る。

8月10日には、JAぎふ黒野流通センターにおいて現地試験の実証を希望する生産者を対象とした第1回事業説明会を開催し、農林事務所から令和2年以降に実施した現地試験の結果や今作での試験内容、注意事項等について説明した。今後、実証希望者の最終確認を行い、現地試験に向けた準備を行っていく。

(園芸産地支援第二係・菊井 裕人、若原 浩司)



【説明会の様子】

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■女性農業経営アドバイザー 令和4年度岐阜ブロック研修「防災クッキング」

岐阜地域の女性農業経営アドバイザーで組織するGLAMA岐阜ブロックは「農業経営改善」「農村女性」「農業・農村づくり」に積極的な役割を果たすことを目的に活動している。毎年構成メンバーを3つの班に分け、それぞれの班が研修会の企画運営を行うこととしており、農林事務所が活動の支援を行っている。

8月3日には、食農教育の一環として有名講師を招聘した「防災クッキング」研修会を「本巣市糸貫ぬくもりの里」で開催した。当日参加した11名の会員は、災害時に対応したメニューの作り方や災害に必要な物資の確保等、実習を通して災害準備について講師から学んでいた。

次回は「高齢の両親の財産管理」をテーマに研修会を開催することとしている。

(園芸産地支援第一係・砂川 匡)



【研修会の実施状況】

安心して身近な「ぎふの食」づくり

■スマート農業 水稻防除でドローンが活躍

8月に入り、早生・中生水稻でカメムシの防除時期を迎えている。管内の農業法人等では、令和元年以降ドローンの導入が始まっており、防除作業で活躍している。

7月29日に「斑点米カメムシ類の注意報」が発令されたことを受け、農林事務所では、農業法人等へドローン防除を含む斑点米カメムシ対策の指導を行ったり、実際のドローン防除に立会って、作業性を確認してきた。

この結果、これまで防除に使用してきた乗用管理機に比べて作業時間が短縮できるうえ、水稻を踏み倒す事がなく、10a当たりの薬液散布量が少ないため、水の運搬も少なく大幅な作業労力の軽減に繋がる事が確認できた。

今後農林事務所では、斑点米の発生状況を確認すると共に、大豆のハスモンヨトウ防除など他作物への利用拡大を検討していく。

(地域支援第三係・松本 政行)



【ドローン防除の様子】

■羽島市水稻種子採種組合 採種ほ抜き穂作業を実施

羽島市水稻種子採種組合が、8月24日、25日に、足近、小熊、桑原の各地区採種ほ場において、出穂期前の抜き穂作業を行った。組合では、水稻品種「岐阜ハツシモSL」の種子を生産しており、出穂直前のタイミングで実施している。

抜き穂作業は、出穂期予備審査と位置づけ、組合員及び種子審査員及び関係機関で、早く出穂した稲株や異形の稲株の除去し、優良な種子生産に欠かせない作業となっている。

今後、農林事務所は、種子審査員として9月初めに、出穂期審査を行うとともに、高品質な種子生産に向け今後も支援を行う。

(地域支援第二係・木村 裕子)



【抜き穂作業の様子】

■有機農業 有機栽培実証ほを設置

J Aぎふでは有機農業を推進するための実証ほを各務原市に設置しており、農林事務所が支援にあたっている。

5月に緑肥を播種するなど土づくりを行い、8月に入って秋冬野菜の栽培を開始した。8月2日にトウモロコシ、カボチャ、にんじんを播種し、8月16日には2回目のにんじんを播種、8月29日にはキャベツの定植を行った。

雨が続いたため、雑草の発生も多くなり、J A職員とともに農林事務所が手で除草作業を行うなど対応にあたっている。今後は、ハクサイの播種やレタス等の定植を計画しており、農林事務所では、引き続き、実証ほの運営管理について指導していく。

(地域支援第二係・水川 誠、谷川 千遥)



【鶏糞散布の様子】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■加工キャベツ 早どりキャベツの栽培に挑戦

各務原市の生産者が、10月初旬収穫を目指したキャベツの早どり栽培に取り組んでおり、農林事務所が支援にあたっている。市場ニーズに答えようと試験的に行うもので、これまでは11月に入ってから収穫を約1カ月早めることを目的としている。

気温の高い7月末に定植を行い、定植後の降雨もなかったことから活着が心配されたが、8月上旬の雨で活着は順調に進んだ。しかし、その後、雨が続けていたため、晴れ間を見つけての管理作業となっている。高温期の栽培であることから、害虫の発生や生理障害の発生が危惧されるため、農林事務所では、引き続き追肥や病害虫防除について指導を行い、品質・収量向上を図るための支援を行っていく。

(地域支援第二係・水川 誠)



【定植後のキャベツ】

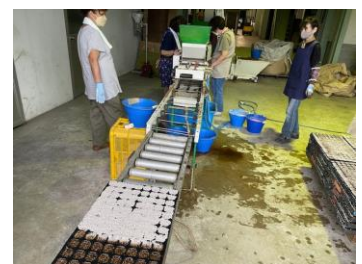
■秋冬ブロッコリー 播種が始まる

岐阜地域では、土地利用型作物として秋冬ブロッコリーの栽培を行っており、生産者38名でJ Aぎふブロッコリー生産連絡協議会を組織している。

協議会向けの苗をJ Aぎふが生産しており、8月4日にJ Aぎふ黒野流通センターで播種が始まった。目標とする育苗箱数は2,600枚で、約10ha分を計画している。

育苗は地元農家が全面受託しており、播種した育苗箱は委託農家へ搬入され管理される。農林事務所では、発芽率の向上や草勢の維持など高品質な苗生産を目指し、灌水量の調整など巡回指導を行いながら支援を行っていく。

(地域支援第一係・藤田 文彦)



【播種作業の様子】